
アニー

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

アニー

【Nコード】

N3029A

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

とある若い弁護士が買った一台の美しい車。その車を買って以来彼の周りで続く不審な女性達の死。車を題材としたホラーです。

第一話

アニー

「どうですか、この車は」

その時ヘンリーは車を探していた。今乗っている車がいい加減ガタがきて買い替えようと思っていたからだ。既に友人にただ同然で売り渡すことが決定している。

それで彼は今車を買いに来ていた。店で品定めをしている。

「そうだなあ」

彼はその長い足で店の中を歩き回り、店の者の案内を受けている。だが彼の目に適う車は中々なかった。

金色がかつた髪を丁寧後ろに撫でつけ、青灰色の目で車を見ている。その顔立ちは鼻が高く、彫が深い。まるでギリシア彫刻のように整い、顔と同じくスラリとして整った身体を濃い藍色のスーツで包んでいる。その身なりから彼が非常に恵まれた立場の人物であるとわかる。

彼は弁護士を営んでいる。このボストンにおいては名の知られた弁護士である。彼はアメリカどこるか世界的に有名な大学で法律を学び弁護士となった。家は元々裕福な家であり何もかも恵まれている。ボストンでも名士として知られている。まだ独身でプールもある豪華な家で一人暮らしを満喫している。

「乗り心地のいい車が欲しいね」

「乗り心地のいい車ですか」

黄色い肌のその店の者はそれを聞いて考える顔をした。

「では日本車なんてどうでしょうか」

「日本車が」

ヘンリーはそれを聞いて考える顔をした。

「トヨタのいいのが入っていますよ」

「トヨタか」

アニー

それを聞いてさらに考える顔になった。

「どうもなあ」

「御気に召されませんか」

「日本車はいいと思うけれどね」

ヘンリーはそのアジア系の店の者に対して言った。

「ただ、少し狭いような気がするんだ。アメリカの車と比べると」

「実際はそうでもありませんよ」

「いや、それでもね。僕の気のせいだと思うけれど」

「はあ」

「日本車はいいよ。悪いけれどね」

「わかりました」

彼はそれを聞いて非常に残念そうな顔をした。それを見てヘンリーは彼が日本人か日系人かな、と心の中で思った。そう思うと悪いことをしたとは思うが車を選ぶのなら話は別だ。別の車を選ぶことにした。

「では大きな車が宜しいのですね」

「そうだね」

彼はそれに頷いた。

「ゆつたりできるからね。何かあるかな」

「それでしたらこちらはどうぞでしょうか」

アジア系の店員はそう言いながら彼を店の奥へと案内した。

「これはお勧めですよ」

「ほう」

見れば大きさも外見も見事な車であった。彼の好みにピッタリだった。色は銀色でそれも彼の気に入った。彼は銀色が好きなのだ。

「これはいいな」

「御気に召されましたか」

「うん。早速買いたい。値段は幾ら何だね」

「それでしたら」

金のことは気にはしていなかった。彼はそれを支払うとすぐにそ

の車を表に出してもらった。早速それに乗って家に帰るつもりであったのだ。

「それで宜しいですね」

「ああ」

彼は笑顔で頷いた。

「試し乗りの意味も含めてね。それじゃ」

「はい」

車に乗った。そしてアクセルを踏み発進した。反動が自分にかかってくる。

「いいねえ」

彼はそれを味わいながら笑った。その反動もいい感触だった。加速の際のそれを味わうのが心地良かった。

加速も速くスピードもよく出た。それが彼をさらに喜ばせた。

「アメリカの車はこうでなくてはな」

運転しながらそう思った。彼が日本車をあまり好まないのはそれもあつた。性能がいいのは事実だが馬力がもう一つなのだ。アメリカの車は馬力がなくてはいけない、そう考えている彼にとって日本の車はそうした意味でも不満であつたのだ。だがこの車は違つていた。そのままのアメリカの車であつた。

瞬く間に家に着いた。彼が思つていたよりもずっと早く家に着いてしまった。

「もう着いたのか」

彼は車の中にあるデジタル時計を見てそう呟いた。予想していたよりもかなり速い。

「御前はどうかやらかかなり元気のいい娘みたいだな。ヤンキーガールそのものだよ」

笑いながら車にそう話し掛けた。

「よし、御前の名前が決まったぞ」

笑いながら言う。

「アニーだ。ありきたりの名前だがいいだろう」

この前観たミュージカルのヒロインの名前をとったのであった。
「それじゃあな、アニー。明日から頼むぞ」

そう言つてこの日はそのままガレージから去つて休んだ。その時彼は見ていなかった。車がどういふわけか微かに揺れ動いたことにまるで喜んでいふように。

次の日かたヘンリーはアニーに乗つて通勤を開始した。通勤は実に快適であり、それが朝から彼を気分よくさせた。

「いいねえ、アニーは上手く動いてくれる」

彼はハンドルを捌きながらそう呟いた。

「朝から気持ちがいいな。こりゃいい仕事ができるかもな」

そう言いながら事務所に向かった。彼の勤める弁護士事務所は何かの弁護士を中心としている。彼はその中の一人であるのだ。

「お早う、ヘンリー」

事務所に着くと一人の品のいい白人の紳士が声をかけてきた。白い髪を後ろに撫で付けている。四十代後半と思われる顔立ちである。だが歳よりも品性を漂わせた顔をしていた。スーツも高価そうなものを着ている。身体からはオーデコロンの甘い香りが漂っていた。

「お早うございます、所長」

彼はその紳士に対して挨拶をした。

「元気そうだね、今日も」

「ええ」

ヘンリーはまた朗らかな笑みをもつて言葉を返した。

「実は車を買換えましたね」

「ほう、そうなのか」

彼はそれを聞いて笑みを作った。やはり品のいい笑みであった。悪い印象は受けない。

「どんな車だね」

「シルバーの可愛いやつだね。後で御覧になりますか」

「いや、まだ仕事には時間があるな」

右手にある腕時計をチラリと見てそう言った。

「今見てみたいんだが何処にあるかな」

「事務所の駐車場です。よかったら御一緒にしますが」

「うん、頼むよ」

所長はそれに頷き彼に案内されて駐車場へ向かった。そしてそこに停めてある彼の車を見せてもらった。所長はそれを見るとすぐに賛辞の言葉を述べた。

「いい車だね」

「有り難うございます」

「形も色もいい。立派な車だな」

「立派なのは外見だけじゃありませんよ、中身ですよ」

彼は笑ってそう説明した。

「乗り心地もね、最高です」

「ほう」

「それだけじゃなくてハンドルもブレーキもね。よくいうことを聞いてくれますよ」

「できた男だな、彼は」

「おっと、彼はないですよ所長」

ヘンリーはそれを聞いて笑って所長に対してそう言った。

「彼女と言つて下さい」

「彼女か」

「ええ。プラチナブランドの美人でしょう？そう思いませんか」

「ふふふ、確かにな」

所長はそれを聞いて笑った。見れば女性と言った方が近い優美な外見であった。シルバーのボディもそう考えて見ればプラチナブランドの髪に全身を覆われているように見える。ヘンリーの言葉に頷いた。

「確かに美しい人だ。どうやら君は最高のパートナーを見つけたみたいだな」

「そうでしょう」

ヘンリーはそれを聞いて笑みを得意気なものにした。

アニー

「そういうことだ。これから頼むぞアニー」

「彼女の名前はアニーというのか」

「ええ。宜しく願いますね」

「わかった。ではアニー、宜しくな」

所長の言葉は戯れが混じっていた。しかしアニーはそれを本気ととったかも知れない。だがヘンリーにも所長にもそれはわからなかった。少なくともこの時は。

第二話

仕事がはじまった。ヘンリーはアニーに乗り取引先に向かった。そこは一人の未亡人の家であった。彼女は夫の遺産を巡って息子と争っていたのである。ヘンリーはその未亡人の担当となっていたのである。

家の前に着く。白い大きな豪邸である。ボストンはアメリカではかなり古い街であり裕福な者が多い。アメリカ東部では気品のある街と考えられているのだ。

この家もボストンに相応しいいい家であった。落ち着いた雰囲気の中に気品を醸し出している。彼はその家のチャームを鳴らした。

「はい」

「すいません、スチュワート弁護士事務所の者ですが」

所長の姓をつけている。所長は実は自分の姓に強い誇りを持っておりそれを自分の事務所の名前にしたという。その誇りの理由は複雑なものであった。彼は実はスコットランド系アメリカ人なのだ。

ボストンのような東部の古い街では主流とされているワスプとは違うのである。宗教もカトリックである。なおヘンリーはウェールズ系である。しかし彼はプロテスタントであった。清教徒ではないが。「私はここでは余所者だがね」

彼は時々それを笑って言う。酒の席等で。

「だがそれにかえって誇りを持つておるよ。私はあの勇敢な騎士達の子孫なのだから」

スコットランドは勇敢な騎士達を多く輩出したことで知られている。イングランドとの戦いにおいても数多くの激戦を繰り広げ、怯むところがなかった。そういう歴史を持っているのである。

それを酒が入った時等に言うのだ。そうしたところはマッカーサーに似ているとヘンリーは考えていた。ウエストポイントにおいて最高の秀才と謳われたサングラスの元帥は自分のルーツがスコット

ランドにあることを終生誇りとしていたのだ。自分がケルト人であるという誇りだ。所長もまたそれを強く持っているのだ。

ヘンリーも自分のルーツは知っていた。ケルトの血を引いているということはわかっている。だが彼は所長やマツカーサー程そうした意識はなかった。あくまで自分は自分と考えていたのだ。宗教についてもそれ程強いこだわりはなかった。

「はい」

チャイムの向こうから声が返ってきた。歳は感じられるが綺麗な声であった。それを聞いたアニーの身体が何故か微かに揺れたように感じられた。

「ようこそ」

すると黒い喪服を着たブロンドの女性がドアから出て来た。五〇代と思われるがまだ肌は若々しく、顔の皺も少ない。まだまだ女性としては華のある容姿であった。

「ヘンリーです、奥様」

「ようこそ」

彼女はヘンリーの挨拶を受けにこやかに微笑んだ。

「それでは早速お話を窺わせてもらいます」

「はい」

こうしてヘンリーはこの気品のある未亡人に誘われ家の中に入った。この家には未亡人の他は誰もいない。率直に言えばヘンリーと二人だけである。アニーはそれを家の外で見てどう思ったであろうか。彼女が女性であったならば。これは言うまでもないことであろう。

アニーは沈黙していた。しかし不気味な沈黙であった。何も語ろうとはしない、そして黙って家を見据えていた。怒りすら車体から感じられていた。

二時間程経ったであろうか。ヘンリーが出て来た。にこやかに挨拶を交わして家を後にする。そしてアニーに乗り込んだ。

「只今、アニー」

アニー

当然ながら返事はない。彼はキーを入れ車のスイッチを入れた。そして動かすはじめた。そこで少しずつ違和感に気付いた。

「あれ、どうということだ」

何故かハンドルが重いのだ。どういうわけか。彼はそれを感じて首を傾げさせた。

「アニー、身体の何処が悪いのか？」

しかし返事はない。それどころか今度はブレーキの効きも、そして乗り心地も変になってきた。しかし運転に支障をきたす程ではない。彼はそれを我慢して事務所に戻った。そして事務仕事を終わらせ別の仕事もしてその日は家に帰った。どういうわけかその日はずっと車の調子が悪かった。

家に帰るとアニーをガレージにおした。そして食事やシャワーを済ませて休んだ。家から灯りが消えた。

ガレージの灯りも消えていた。ヘンリーの家は暗闇に覆われた。筈だった。どういふことがガレージのシャッターがゆっくりと上がってきたのだ。

だがそれに気付いた者は誰もいない。中からアニーが出て来た。しかし運転席には誰もいなかった。

ライトが光った。不気味な、鈍い光だった。まるで冥府の螢の様な。彼女はその目を光らせたまま走って行った。その行く先が何処なのか誰にもわからなかった。

翌朝ヘンリーは起きるとトレーニングウェアに着替えた。日課として毎朝ランニングをしているのだ。健康の為である。運動不足ではいざという時体力が続かず大変だからだ。彼は着替え終わると家の前に出た。

「おや？」

そこで彼は気付いた。どういうわけかガレージのシャッターが僅かに上がっているのだ。昨夜完全に閉めた筈であるのに。彼はそれを見て首を傾げた。

「おかしいな、閉めた筈なのに」

だがすぐにそれは自分の間違いだろうと思った少し閉め忘れることもある。その時はそう考えた。

そこでそれについて考えるのを止めて準備体操をしてランニングに向かった。それが終わるとシャワーを浴び、着替えて食事と身支度を済ませて事務所へ向かった。ガレージを開けアニーに乗る。

「あれ」

乗ってみたすぐにわかった。

「調子が戻ってるな」

ハンドルもブレーキも元に戻っていた。乗り心地もだ。どういわけかアニー自身がうきうきしているように感じられる。それが何故なのかは彼にはわからなかった。

「まあ昨日はたまたまか」

そう思い事務所に向かった。そしてオフィスに入った。

「おいヘンリー、大変なことが起こったぞ」

「何かあったんですか？」

所長が所長室からオフィスに来るなりヘンリーに声をかけてきた。

彼はそれを受けて顔を向けさせた。

「君の担当の未亡人のマーガレットさんだがな」

「はい」

「昨夜亡くなられた。事故でだ」

「事故!？」

「そうだ。家の前だな。車に刎ねられて死んだらしい」

「昨夜ですか」

彼はそれを聞いて暗い顔になった。

「昨日まであんなに元気だったのに」

「まあ仕方ないことだ」

暗い顔になったヘンリーにそう言って慰めをかけた。

「せめて葬儀には行ってやれ、な」

「わかりました」

「他のことは我々でしておくからな。君は彼女のことからは離れた

方がいい。わかるな」

「はい」

「ではな。他の仕事に回ってくれ」

こうしてその未亡人のことは仕事に関しては終わった。遺産は結局息子のものとなり白い品のいい邸宅もその息子のものとなった。

ヘンリーはそれを聞いていたたまれない気持ちであった。

「車、か」

引っ掛かるものがあるのは事実だ。彼は息子を疑っていた。しかし彼は今はシカゴに住んでいる。それに遺産を巡って争っているとはいえ実の親子である。揉めてはいても会えば一緒に食事をしたりしていた。彼も同席したことがあるが仲は悪くはなかった。思ったよりも醜い対立もなくすんなりいく仕事だと内心喜んでいたのである。だがこうなってしまうた。息子が犯人でないとしても疑いたくもあつた。

それから暫く彼は普段通り仕事を続けた。ある日行きつけのレストランで昼食をとることにした。その店のステーキがお気に入りなのである。

アニーを駐車場に入れ店の中に入った。そして席に座りウェイターを呼んだ。やがて若い女性のウェイトレスがやって来た。

「御注文は何にしますか」

「そうだね」

彼はメニューを読みながら考えていた。そして答えた。

「サーロインステーキにしようか。いや、待ってくれ」

「どうかしたんですか？」

「今日は止めておこう。チキンステーキがいい」

「チキンステーキですね」

「うん。サラダのドレッシングはオニオンで。いいかな」

「わかりました。それでは」

「うん」

チップを渡して彼女にオーダーに行かせた。その後ろ姿をゆっくり

りと眺める。ポニーテールに制服のミニスカートから出ているスリリとした脚が印象的だ。まだ十代らしくその健康さと若さが彼の目に止まった。三十を過ぎた彼にとってはもう眩しくなりだすものであった。

「若さか」

彼はふとそれについて考えた。

「何か急に懐かしくなってくるな」

最近何かと色々なものが気になりだしてきた。腹や髪の毛のことが。だがあの頃はそんな悩みなぞなかった。それを思うだけでまた懐かしさがこみあげてくるのだ。

学生時代はバスケットボールをやっていた。マイケル・ジョーダンのファンだった。彼のバスケットボールとしては小柄ながらそのバネを活かしたプレイに感動すら覚えていた。バルセロナオリンピックの試合はビデオで今でも家に置いてある。気が向けば今でも見る。あの頃のアメリカのバスケットが大好きであった。

「そういうものを見ること自体がもう歳なのかな」

不意にそう思ったりもする。何かと苦労して若さを保とうはしている。だがどうにもそれは儚い努力に終わりそうだ。それでも彼は努力を続けていた。やっていれば多少はましだろうと考えながら。

あれこれ考えても仕方のないことを考えているうちに注文した料理が来た。まずはスープである。

コンソメのスープだ。中に玉葱や人参が入っている。それを飲むとオニオンのサラダ、そしてメインディッシュのチキンステーキである。湯気と肉汁を出して皿の上に置かれていた。

「どうぞ」

「有り難う」

スープとサラダを食べ終えた彼のところにそのステーキが置かれた。持って来ているのはあの若いウェイトレスである。にこやかな笑みを彼に向けている。

「デザートは何にしますか」

「そうだね」

彼は暫く考えた後でそれに答えた。

「アイスクリームがいいな。バニラで」

「畏まりました。それでは後でお持ちします」

「うん」

ステーキは中々美味かった。鶏のあっさりとした味に濃いソースがよく合っていた。仕事で疲れた身体に心地良いエネルギーを与えてくれる。彼はそれを食べ終えた後でパンを食べ、運ばれたデザートも食べ終えてその店を後にすることにした。勘定を払ったところであのウェイトレスが扉を開けてくれた。

「有り難う、気が利くね」

「いえ、そんな」

彼女は笑ってそれに応えてきた。

「料理もよかつたし、サービスもいい。あらためて気に入ったよ」

「店がですか？」

「そうだね」

本当は別のものも気に入っていたがそれは口には出さなかった。

「また来るよ」

「はい」

彼女にまたチップを渡し店の前の駐車場に向かう。そこからもうアニーが見える。こちらに向けて停められていた。そう、こちらに向けて停められていたのだ。

アニーはヘンリーと彼女のやりとりを見ていたのだ。それも一部始終。それを見ていた彼女のボディが微かに震えていた。微かに、ではあるが。だがヘンリーも他の誰も彼女には気付きもしなかった。それからヘンリーは昼食はいつもこのレストランで採るようになった。ウェイトレスも同じである。彼女はよく働き、明るく、元気がよかつた。それがいたく気に入ったのである。

「明日は休みだったね」

ある日彼は食事をしながら彼女に声をかけた。

「ええ、明日は水曜ですから」
「残念だね。君に会えないなんて」
「けれどお店は開いていますよ」
「そういう問題じゃないんだよ。僕はここに食べ物だけもらいに
来ているわけじゃないんだ」
「じゃあ何ですか？」
「ただで貰えるものだよ」
「ただで？」
「そうさ、スマイルさ」
彼はにこりと笑ってそう言った。
「スマイルをね。これはただだらう？」
「さて、それはどうでしょうか」
だが彼女はそれには疑問の声を呈した。
「違うのかい？」
「今日び女の子はスマイルもただではあげませんよ」
「おやおや、厳しいんだね」
「ハンサムで格好いい人にしかあげないんですよ。おわかりですか
？」
「じゃあ僕はそのハンサムで格好いい人なのかな」
「さて、それはどうでしょう」
ここで答えをはぐらかしてきた。
「他の人から見れば」
「じゃあ君は？」
「笑顔を見せていることでおわかりだと思いますが」
「わかったよ」
それを聞いてまたにこりと笑った。どうやらお互い思っているこ
とは同じのようだ。それを確認できてほっとしていた。彼自身は。
アニーは違っていたのだ。しかしそれにはやはり誰も気付きはし
ないのだ。水曜日この若いウェイトレスは休みであった。その夜に
事件が起こった。

アニ-

第三話

木曜日ヘンリーはそのレストランにやって来た。そしていつもの席に座りいつものウエイトレスを呼んだ。今日はデートにでも誘ってみようと思っていた。

(少し歳が離れているけれどいいな)

自分で自分にそう言い聞かせていた。相手が高校生位ならまあ許される。年の差カップルなんて幾らでもいる。それに自分は年齢よりも若く見られる、大丈夫だ、そう自分に言い聞かせながら念入りに髪も服も調べてレストランにやって来た。懐に映画のチケットを二枚忍ばせて。今話題の恋愛映画だ。

(これならいいな)

(ロザンナだったかな)

覚えたての名だ。その名前を思い出すだけで楽しい気持ちになる。まるで高校生に戻ったような気持ちであった。

車から出てレストランの扉を見る。少し古風な造りの扉が今日は重苦しいように感じられた。彼はそれをくぐって勇気を出すことにした。だが一つ気懸りがあった。

近頃またアニーの調子がおかしいのだ。またハンドルやブレーキが重く、乗り心地が悪い。それが気にはなっていた。今朝になってそれが急になおっていたが。それも不自然であった。

(どういうことなのだろうな)

アニーを見てチラリとそう思った。だがそれよりも今はこれからのことの方が重要であった。彼は意を決して店の中に入って行った。だがそこで待っていたのは思いも寄らぬ答えであった。

「えっ……」

彼はそれを聞いて絶句した。

「それは本当のことですか!？」

「はい」

アニー

彼女の同僚のウエイトレスがそれに答えた。彼女も知った顔である。

「昨日の夜急に病院から連絡がありました。それで」

「そうですか」

答えはできてもまだ呆然としていた。

「まさかそんな」

「私達も信じられません」

同僚も落ち着いてはいなかった。

「おとついまであんなに元気だったのに」

「それが急に……」

別の同僚の目は赤くなっていた。どうやら彼女とはとりわけ仲がよかつたらしい。

「はあ」

彼もまた呆然としていた。もう食事どころではなかった。力なく店を去り事務所へ戻った。彼の心は重かったがアニーの運転は軽やかになっていた。不自然な程に。それはまるで心を持っているようであった。

それから数日の間流石に落ち込んだ。仕事も手につかない。見るに見かねた所長が彼に声をかけてきた。

「気持ちわかるがな」

「すいません」

「謝らなくていいさ。それより君の有給休暇のことだが」

「はい」

「かなりたまっているだろう。ここで何日かとってみたらどうだ」

「休めということですか」

「そうだ。今のままではどのみちよくない。旅行にでも行って気分転換してきたらいい」

「わかりました」

こうして所長の勧めで彼は有給休暇をとることにした。事務所を出るとまず本屋に向かい地図を買った。それを見ながら手頃な旅行

先でも探すつもりだったのだ。

旅行は好きだ。学生時代はヒッチハイク等をしてアメリカ中を回ったものだ。サンフランシスコまで行ってその中華街で美味しい料理を心ゆくまで堪能したこともあればニューヨークでジャズに耳を傾けたこともある。彼にとつて旅は実に楽しいものであった。

それについて考えるだけで気持ちが楽になった。彼は家に帰ると食事とシャワーを済ませ、バーボンを傍らに置きながら地図を開いた。手頃なところに行くつもりであった。

「何処にしようか」

だが候補地はこれと違ってなかった。遠くへ行く気にはなれなかった。近い場所で済ませようとさえ思った。ここで一つの街が目に入った。

「ここにしてみるか」

そこはワシントンであった。言うまでもなくアメリカの首都である。学生時代に一度ホワイトハウスの見学に行ったことがある。だが弁護士になってからは行ってはいない。今度行くとすれば二度目になる。

決めるとそこからは迷わなかった。ベッドに入ってゆつくりと休んだ。そして朝早くに家を出た。アニーのいるガレージを開けた。

「遠くへ行くぞ」

見ればいつものスーツとは違いラフな格好であった。右手にはトランクを持っている。旅支度であるのは言うまでもなかった。

アニーに乗り込むとそのまま家を出た。鍵もガレージも閉めた。数日は誰もいない家になる。ヘンリーは我が家に別れを告げるとそのまま一人旅に出た。少なくとも人間は一人であった。

高速道路を飛ばしてワシントンに向かう。ポストンを出て瞬く間にハートフォードに到着した。そしてそのまま南に下りニューヨーク州に入る。ワシントンまではまだまだ距離があった。だが彼はその旅路も楽しんでいたのである。

アメリカの道は広い。メガロポリスでもそれは変わりはない。

そして車も思つたより少なかつた。彼は思うがままに速度をあげながら進んでいた。そして適当なところでドライブインに入つて休息をとつた。夜まで走つて見かけたホテルに入った。こうしたいささか行きずりの行為もまた旅の醍醐味であつた。彼はそれも楽しんでた。

「ワシントンに着いたらどうしようか」

ホテルの部屋でそう考えていた。実は着いてからのことは何も考えてはいなかつた。ただワシントンに行こうと思いついただけであつた。他には何も考えてはいなかつたのだ。

地図や旅行ガイドを見てもこれといつて考えつかない。ホワイトハウスにしろ前に一度見たことがあるのもう一度見ようとは思へなかつたのだ。

考えても結論は出ない。もう考えるのは止めにした。その場その場の成り行きに任せることにした。どうにかなるだろうと思つことにしたのだ。

翌日ワシントンに到着した。見れば学生時代に来た時とあまり変わりはない。かなり前に来たつもりだがどうもその時とさほど変わつてはいないのである。少なくとも彼の頭の中にあるワシントンと今のワシントンはほぼ一緒であつた。

「あの時は親父が大統領だつたかな」

アニーの中からホワイトハウスを眺めながらそう呟いた。

「息子が大統領になつても外見は変わりはないんだな」

世の中とは案外そういうものなのかもしれないと思つた。アメリカという国は変わるのが早いと言われている。しかし実際にはそれ程変わりはないものなのかもしれない。彼の住んでいるボストンなどは独立戦争前の空気がまだ残っている程だ。東部ではかなり古風な街とさえ言われている。

ホテルを見つけてそこにアニーを置いた。そしてぶらりとワシントンを回ることにした。目に入るその街並は彼の記憶の中にあるワシントンのままであつた。歩いている人々も同じである。

ショッピングモールに入るとボストンより品揃えはいいように思われた。だがニューヨーク程ではなかった。アメリカの首都ではあるが最大の街ではない。だからであろうか。

しかし食事は違っていた。色々ある。こっちはニューヨークでもそうだが彼はどういうわけかワシントンの味の方が好きであった。ニューヨークの料理はどれも大味な気がするのだ。メトロポリタン歌劇場に行った時帰りに食べた中華料理がかなり大雑把な味だったのはよく覚えていた。イタリア料理も日本料理もニューヨークのそれは大味に思えたのであった。それがアメリカの料理であり、ニューヨークの料理だと言われればそれまでだが彼は味には少しうるさかった。繊細な料理が好きなのである。

「こっちの料理はそうでもないからな」

とりあえず何処に入ろうかと探し回った。中華料理もいいしタイ料理もいい。何故か今はそうしたアジアの料理が食べたかったのだ。ふと韓国料理の店が目に入った。ハングルで何やら書かれている。彼はハングルは読めないが横に書かれている英文を見た。するとそこには料金まで書かれていたのだ。

「成程な」

見ればかなり安かった。味はどうかわからないがその値段が気に入った。しかしそこで一つ気になることがあった。

「辛過ぎないだろうな」

繊細な料理が好きなのである。韓国料理はいささか辛さが強い。それを考えるとどうかと思った。だがそれよりも店の中から漂ってくる美味そうな匂いに惹かれた。彼は焼肉は度々食べている。好物の一つであるのだ。

「ここは入ってみるか」

そう決心して中に入った。すると流暢な英語で挨拶が返ってきた。

「いらっしやいませ」

「うん」

彼も英語で挨拶を返した。そしてカウンターに座って店の者に尋

ねた。

「ビーフでいきたいんだけど。これを全部持って来てくれ」

「かしこまりました」

コースメニューを頼んだ。そして暫くしてタレに漬けられた赤い肉が運ばれてきた。網の下のガスに火が点けられる。彼はそれを見ながら言った。

「日本風の焼肉かい？」

「わかりますか」

それを受けてガスに火を点けていた三十代前半程のアジア系の女が顔を上げた。顔立ちは韓国系というよりは日系のそれに見えた。

「実はうちは日本の焼肉屋のチェーン店なんですよ」

「そうなのかい」

これは意外な返事であった。では看板のハンゲルは何だろうと思った。彼はそれについて尋ねることにした。

「看板のあれは」

「宣伝です」

彼女はそう答えた。

「ハンゲルで書いた方が本場らしく見えますよね。それです」

「そうだったのか」

「うちはそうしてるんです。味は少し違うと思いますが」

「そうみたいだね」

焼けた肉を一口食べながらそれに応えた。フォークで食べている。

「韓国の焼肉とはまた違う味になっているよ」

「これも日本風だと思います」

「何かまるやかな味だね。気にいったよ」

「有り難うございます」

こうして店の者と楽しく話をしながら焼肉を食べた。まさかこんなところで日本風の焼肉を食べるとは思わなかったがその意外な出来事にかえって気分をよくした。店を気分よく出てワシントンの検索を再開した。

「食べてみれば何もすることがないな」

これはまた意外なことだった。政府の関連施設を見る気にもなれない。そうなればここですることは極めて限られてくるのが実情であった。

「どうしようかな、ここには球団もないし」

野球があればそれを観ることも可能だがここには球団自体がない。かつてはセネターズという球団があったが移ってしまった。何でもエクスポズがこちらにやって来るとい話があるが実現するかどうかはわからないのだ。ちなみに彼は幼い頃から地元球団であるレッドソックスのファンである。この球団のファンは熱狂的な者が多いが実は彼もその一人である。優勝した時は朝まで飲みあかしたものであった。ちなみに一番嫌いな球団はヤンキースでありそのオーナーは彼にとつてはこの世で最も嫌いな者の一人である。常々ヤンキースやこの名物オーナーの悪口を言っている。野球となれば人が変わるのである。

「少し早いけれど飲むかな」

ふとそう思った。まずは横にあった店で新聞を買う。レッドソックスはヤンキースに勝っていた。それを見てさらに気分をよくさせた。

酒場を探すと丁度いい店があった。そこをチェックした後で時間を潰すことにした。適当な場所を歩き回ったり、カフェに入ったりして時間を潰した。

そして店が開く時間になるとそこに入った。その日はそこで飲んだ後でホテルに帰った。それでこの日は終わりであった。

一日でワシントンに見切りをつけた。彼はこの街を後にした。そしてボストンに帰った。途中一泊して帰った。いい気分転換にはなった。アニーの動きも非常によかった。

第四話

ボストンに帰ると次の日から仕事に復帰した。早速仕事が入っていた。

「この男の弁護ですか」

「そうだ」

所長は彼に一枚の顔写真を見せてそう答えた。写真には品のよさそうな老人が映っていた。

「妻への殺人容疑で裁判にかけられている。彼の弁護を頼みたい」

「わかりました。ですが一つ気になることがありますね」

「何だね」

「彼が殺人をおかしたのですか」

「そういうことにはなっているな」

「そうですね。私がみたところそんなことをするような人物には見えませんがね」

「君はこうした仕事にはあまり関わってはいなかったな」

「ええ、まあ」

彼は答えた。

「あまり。弁護といっても殺人とかはしたことはありません」

「だからだ。殺人というものはな、誰でもおかし可能性があるものだ」

「驚かさないで下さいよ」

「いや、これは本当のことだ」

彼はそう断ったうえで言葉を続けた。

「君だって今まで誰かを憎いと思ったことはあるな」

「ええ、まあ」

それに頷いた。三十年以上生きてきて誰かを嫌いになったり憎んだりしないで済むということはまず有り得ないのではないかとさえ思えた。

「殺したいと思ったことはあるな」

「否定はしません」

「これも思ったことがない者はまずいないだろう。それにも頷いた。ではそれだけで充分だ。誰かを殺すにはな」

「そうなのですか」

「そうだ。だが彼が本当に殺したかどうかは別問題だ。そして」
また言った。

「例え彼が殺人を犯していても、そして君が心の中でどれだけそれを許せないとしても我々は彼が救われるよう最大限の努力をしなくてはならない。いいね」

「わかりました」

それが弁護士との宿命であった。例えどの様な凶悪犯であってもその命と人権の為に立たなければならぬのだ、因果といえば因果な商売であった。

彼は早速仕事に取り掛かった。まずは証拠を集め、依頼人と話をする。依頼人は容疑者自身であった。

「では貴方は無実だと仰るのですね」

「はい」

彼は拘留所のガラスの向こうでそう言って頷いた。

「私は妻を殺してなぞいません」

「わかりました。では奥さんは何で死んだのでしょうか」

「あれは事故でした」

彼はそう答えた。

「事故」

「はい。妻はかなり前から不眠症に悩まされていまして。それですと睡眠薬を飲んでいたので」

「ですがそれは貴方が買って来た薬なのですよね」

「ええ、まあ」

彼はそれを認めた。見れば目の光も穏やかで顔付きも優しくげだ。やはり人を殺すようには見えない。

「しかし私は妻にはあまり飲み過ぎるなど忠告していました」
「ふむ」

ヘンリーはそれを聞いて考え込んだ。

「ではあれはあくまで事故であつたと」

「私の家族は今では妻だけです。その私がどうして殺す必要がありますか」

その声が大きくなった。

「弁護士さん、私を信じて下さい。私は無実です」

「わかりました」

形式的な言葉であるがそれに応えた。

「貴方は必ず私が救い出してみせましょう。いいですね」

「有り難うございます」

これでその場は終わつた。彼は事務所に戻り別の仕事に取り掛かつた。今度は今回の裁判で選ばれた陪審員達に関する資料である。

十二人分の資料が彼のデスクの上に置かれていた。

彼はそれを見ていた。一人一人の経歴や癖、考え方等まで書かれている。彼はそれを見ながら考えていた。今後の裁判の進め方を。

「どうだね、進み具合は」

所長が資料に目を通してしているヘンリーに声をかけてきた。

「順調とっていていいですね」

彼はそれに顔を上げてそう答えた。

「陪審員にもおかしな人物はいないようです。容疑者にも殺す動機は見当たりません」

「ふむ」

「おそらく無罪を勝ち取れるでしょう」

「それはいい。だが一つ不思議なことがないかね」

「不思議なこと」

「この事件に関してだ。何か思うところはないかね」

「そうですね」

彼はそれを受けて考え込んだ。

「彼の妻の遺体の解剖結果をみてくださいと」
「ふむ」

「明らかに致死量の薬を飲んでいます。それまでとは全く違った量で」

「自分で飲んだのかね」

「そうですね。飲んだ時間と死亡時間を考慮しますと。口の中も乱れた形跡はありませんし」

「間違つても容疑者が無理矢理飲ませたというわけではないのだな」

「検死結果を見る限りそうですね。私はそう思います」

「では自殺ということになるな」

「ですかね」

彼はそれを聞いて首を捻らせた。

「そう判断するにはまだ証拠が揃つてはいないと思いますが」

「容疑者の妻は長い間不眠症に悩まされていたそうだが」

「はい」

「他にも病気はなかったか」

「あつ」

ヘンリーはそこに気付いた。

「それも不治の病とか。それなら自殺の理由がわかるな」

「病気を苦しめての自殺、というわけですか」

「そういったラインからも考えていった方がいいかもな。どうだ」

「わかりました。調べてみます」

彼はそれを受けて容疑者の妻のことに關しても調査を続けた。そして病院で予想通りのことがわかったのであった。

容疑者の妻は癌であった。それも末期の。何年もそれで苦しんでいたらしい。

これで決まりであった。彼は陪審員達にそれを言い、資料を持って裁判に挑んだ。その結果見事無罪を勝ち取ったのであった。

これで彼の名はあがった。拍手の中裁判所を後にしようとするところで彼を呼び止める声があった。

「やるじゃない」

それは女の声であった。低く、何処か知的な印象を受ける。見ればそこにグレーのスーツとスカートに身を包んだブロンドの女性が立っていた。黒縁の眼鏡もかけている。

「君は」

「貴方の同業者よ」

彼女は笑ってそう答えた。

「キャスリン。キャシーって呼ばれてるわ。ニューヨークでやっているの」

「そのニューヨークの弁護士さんがどうしてここに？」

「たまたま出張でね。ここでちょっとした訴訟の弁護をしていたのよ」

「へえ」

アメリカは訴訟社会とさえ呼ばれている。それを専門に取り扱う弁護士も多い。あまりにも訴訟が多いので訴訟産業とさえ皮肉られている程である。

「それが終わって傍聴席で見ただけけれど。上手くやったわね」

「上手くやるのが僕達の仕事じゃないか」

彼は笑ってそう答えた。

「そうじゃなきゃ食べていけなくなるよ」

「面白いことを言うわね」

「君だって同じだろ」

「その通りよ」

彼女はそれを認めた。

「どうやら貴方とは色々とお話して楽しいことがあるようね」

「告白かい？」

「そんなところよ。どう、この後カフェでも」

「ニューヨークは積極的だね」

今度はボストンの者としてそれに応えた。

「こんな田舎町じゃ考えられないよ」

「ニューヨークはね、何でも積極的なのが信条なのよ」
眼鏡の奥の青い目を光らせてそう言う。

「じゃあ決まりね。仕事が終わったらこの裁判所の前で」
「もう少しムードのある場所がいいんだけど」

「じゃあ球場の前で。いいかしら」

「今日はヤンキースは負けるよ」

彼はそれを聞いてニヤリと笑った。

「レッドソックスにね」

「強気ね」

「今のレッドソックスには何処も勝てはしないさ」

今連勝街道をひた走っているところであった。こうなった時のレッドソックスは誰にも止められないのである。昔から熱狂的なファンが多い理由はそこにあつた。色々と不運なことも起こったりする球団であるがそのドラマティックさが印象的な球団なのである。

「あら、ヤンキースだって今調子がいいわよ」

どうやらキャシーはヤンキースのファンらしい。ヘンリーはそれを感じて内心ムツとした。

「今シーズンは優勝かしらね」

「それは今ここで僕達が言ってもはじまらないね」

彼は無然としてそう答えた。

「球場でそれははつきりするよ。レッドソックスが勝ってね」

「じゃあ球場でそれをはつきりさせましょう」

「望むところ」

こうして彼は仕事の後キャシーと球場でデートをすることになった。デートといっても彼は不機嫌であつた。何しろ相手は憎きヤンキースのファンなのであるから。

「なあアニー」

彼は車に乗りながらアニーに語り掛けた。

「ヤンキースってのはなあ、あんなのは野球じゃないんだよ」

彼のヤンキース嫌いは相当なものである。それを裏返すとそのま

まレッドソックスへの愛情となる。同じリーグ、地区にいるだけに憎しみは尚更であった。

「思いきり叩き潰すべきなんだよ。あんなオーナー永久追放になっちまえ」

実は選手達はそれ程嫌いではない。よくレフトを守っているいかつい顔の日本人はわりかし好きである。最初顔を見た後で年齢を聞いて驚いたものだが。

「あれが二十代の顔か」

そう思ったものだ。まるで日本の映画大魔神のようだと思った。シアトルには本当にそんな仇名の日本人選手がいたと聞いているが実は彼はそちらはよく知らない。

ちなみに彼の大嫌いなそのヤンキースのオーナーは二度程永久追放になっている。コミッショナーと衝突することも多い何かとお騒がせの人物なのである。だが少なくとも彼は野球が好きではある。

だから最低限の許容範囲にはあった。ヘンリーの心の中では。悪態をつきながらも試合を楽しみにしていた。当然レッドソックスが勝つものと信じて疑ってはいなかった。

時間が来たので球場に向かった。アニーのハンドルもブレーキも絶好調であった。彼はそれを確認してさらに上機嫌になった。

「御前もレッドソックスの勝利を願っているんだな。当然だよ」

ヘンリーは上機嫌でまたアニーに声をかけた。

「今日勝って一気に突き放す。そして優勝だ」

優勝について考えるだけで頭がとろけそうだった。勝利に沸き立ち、抱き合う愛する選手達のことを思うとそれだけで頭が一杯になる。優勝と選手達と共に味わうあの一体感素晴らしいものはない。少なくともいつも優勝して当たり前といったヤンキースのファンにはわからないだろうと思っていた。

第五話

あれこれ考えているうちに球場に着いた。第二次世界大戦前からあるかなり古い球場だ。レッドソックスの歴史もこの球場と同じでかなり長いのである。

「今日はどっちが勝つかな」

駐車場に車を停めると球場に入ろうとしている観客達の声が聞こえてきた。

「レッドソックスが勝つに決まってるだろ」

「何でそう言えるんだよ」

「レッドソックスの方が強いからだ」

「おいおい」

「その通りじゃないか」

ヘンリーはそれを聞きながら心の中でそれに同意した。

「レッドソックスがあんな連中に負けるか」

そう言いながらふとそこである選手について思い出した。一年だけレッドソックスにいた黒人の選手だ。

「ローズ………だったかな」

背が高く、引き締まった身体をしていた。脚と肩がやけによかったのを覚えている。

「日本にいったのだったかな。確かキンテツとかいう球団に」

日本のことはよく知らない。どんな球団があるのかもよくは知らなかった。ただ、日本に行ったと聞いて少し寂しい思いをしたことがある。

「うちにもうちよつといたらもつと打っていたかもな」

不意にそう考えた。肩と脚以外はそれ程高い評価を受けてはいなかった。だが彼はそんなごく普通のプレーヤーに何故か非凡なものを見ていた。彼はきつと凄い選手になるとさえ思った。思っただけで当の本人が日本に行ってしまったのでそれはなくなってしまうた

が。

「日本で寿司や焼肉でも食べているのかな。元気だったらいいが」
そうは思ってももういない選手のことを言ってもはじまらない。
待ち合わせ場所に向かった。彼女はまだいない。時計を見ればまだ
早かった。十分程早く来過ぎてしまったようだ。

「まあこれ位ならいいか」

彼は時計を見ながらそう呟いた。

「待つのも男の仕事らしいからな。誰が決めたのか知らないが」

「あら、そうとばかりは限らないわよ」

「キャシー……だっ たっ け」

「ええ」

見ればそこにそのキャシーがいた。先程のスーツとは違って変わ
ってティーシャツにジーンズといったラフな格好である。それに対
してヘンリーはスーツであった。

「随分身軽だね」

「野球を応援する時はそうじゃないの？」

「ニューヨークではどうか知らないけれどね。僕は球場ではいつも
スーツさ」

「そうなの」

「レッドソックスのファンはね、上品なんだ」

「初耳ね」

熱狂的なファンが多い。そしてその中には当然の様にとんでもな
い者も多い。彼の今の言葉は率直に言うならば単なる欺瞞であった。
レッドソックスのファンが大人しいとはアメリカの多くの者が一言
で嘘だと言いつ切る類のものであった。

「まあヤンキースも人のことは言えないけれどね」

「で、何処で見るつもりなんだい？」

ヘンリーは少し不機嫌そうな声を出して彼女に尋ねた。

「まさか三塁側で見るつもりじゃないだろう」

「そんなことしたら命が幾つあっても足りないわ」

キャシーは笑いながらそう答えた。

「それは貴方もそうじゃないかしら」

「確かにね」

ヘンリーはそれに頷いた。

「一塁側で見る気はないよ、言っておくけれど」

「わかったわ。じゃあバックネットの方で観る？」

「？チケットでもあるのかい？あそこはそうそう」

「あるわよ、チケットなら」

彼女はそう言ってジーンズのポケットから二枚のチケットを取り出した。見れば確かにバックネットの席のものであった。しかも二つもある。

「それも二枚ね」

「運がいいね」

「運がいいんじゃないわ、さっき買ったのよ」

「よく手に入ったね」

「貴方と裁判所でお話した後ですぐにここに来て買ったのよ。必要になるからと思ってね」

「バックネット側を？」

「そうよ。あそこなら問題ないでしょ、レッドソックスの信者さん」

「参ったよ、ヤンキース信者さん」

そう皮肉を言いながら球場に入った。そしてバックネットの席に二人並んで座った。丁度そこがチケットの席であったのだ。

肝心のゲームであるがヘンリーにとって残念なことにヤンキース優勢のまま進んでいた。レッドソックスは何度もチャンスを作るがそれでも中々決め手を打つことができないでいた。それに対してヤンキースは要所要所をしめ、ゲームを有利に進めていた。キャシーはそれを見てにこやかに笑っていた。

「うちの勝ちみたいね」

「それはどうかな」

だがそれでもヘンリーは諦めていなかった。

「野球は九回までである。まだ六回だ」

「あと三回しかないわよ」

「言い方を変えるべきだな。まだ三回もある」

「逆転できると思っっているの？うち相手に」

「当然」

彼は毅然としてそう言い返した。

「ヤンキースが相手だったら楽勝だね」

「言ってくれるわね」

今度はキャシーが憚然となった。

「ゲームが終わってそう言っただけならいいから」

「まあそれは最後のお楽しみってところだね」

「そうね。じゃあヤンキースが勝つと予言しておくわ」

「それなら僕はレッドソックスを」

「勝った方がダイナーを奢るってことでいいわね」

「いい条件だね」

ヘンリーの方もそれを了承した。こうして二人はゲームの結果を賭けることになった。ゲームはそのまま九回に入った。ヤンキース一点リードのまま九回裏となった。

ここでレッドソックスは攻勢に出た。ヤンキースのストッパーを攻めてワンアウト二、三塁となった。一打サヨナラの絶好のチャンスであった。

「さて、と」

ヘンリーはそれを見てにんまりと笑った。ここまできたら絶対に勝てるかと確信していた。

「次からクリーンナップだ。勝負は決まったね」

「さあ、それはどうかしら」

だがそれでもキャシーは強気だった。

「ヤンキースが強いのはこれからのよ」

「生憎レッドソックスは土壇場に強くてね」

ヘンリーの方が余裕があった。

「ごういう状況になったらそうそう負けたことはないんだよ」
「けれど今日は違うわ」

キャシーはまだ諦めない。

「このシーズンがかかっているからね、今日は」

「それはうちもだよ」

それを聞いたヘンリーの顔も変わった。

「まあ見てていたらわかるよ。うちの正念場での強さがね」

「期待しているわ」

キャシーは慥然としながらそう答えた。

「ヤンキースのそれをね」

「ふん」

そうこう話している間にもゲームは進んでいた。レッドソックスのバッターのバットが一閃した。

「やったか!？」

白いボールが一直線に進む。そしてそのままスタンドに入った。

バックネットの席から打った瞬間からボールがスタンドに入るその時まではつきりと見えていた。勝利の流れをそのまま目に焼きつけることができた。

「よし!」

ヘンリーはそれを見て会心の笑みを浮かべた。それに対してキャ

シーはその顔を不機嫌なものにさせた。

「やられたわね」

「今シーズンはこれでうちの優勝だな」

ヘンリーの目の前ではサヨナラホームランを放ったそのバッターが今ホームベースを踏んだ。歓喜の声でナインに囲まれていた。それが何よりの証拠であった。

試合は言うまでもなくレッドソックスの勝利であった。まるで優勝したような騒ぎであった。ヘンリーは勝利の余韻を味わいながらゆっくりと席を立ててキャシーに対して言った。

「じゃあ行こうか」

「ええ、わかってるわ」

キャシーは憮然としてそれに頷いた。

「何がいいの？食べるのは」

「シーフードがいいな」

彼はそう答えた。

「行こう。新鮮なロブスターを出してくれる店を知ってるんだ」

「ロブスターね。わかったわ、それで行きましょう」

「うん、頼むよ」

「全く。ヤンキースもだらしないわね。もうちょっと頑張りを見せなさいよ」

悪態をつくキャシーを伴って球場を後にした。そして彼等は駐車場に向かった。夕方にはじまったゲームであるが終わる頃にはもう真つ暗になっていた。彼等は照明に照らされた駐車場の中を進む。

「ニューヨークじゃ夜こんなふうには歩けないらしいね」

「ニューヨークの治安の悪さは有名である。彼はそれについて言及してきたのだ。」

「最近はどうでもないわよ」

だが彼女はそれを否定した。負けたというのに軽やかな足取りであった。

「市長が変わってからね。治安がよくなったわよ」

「そうだったんだ」

「まず地下鉄が綺麗になったわね。あのサウスIIブロンクスも変わったし」

「サウスIIブロンクスのことは聞いたことがあるな」

ヘンリーは顎に手をあててそう述べた。

「ビルIIクリントンも事務所を構えたしね。けれどそんなに変わったのかい？」

「少なくとも今までみたいなことはないわよ」

「そうなんだ」

「まあ今でも用心は必要だけれどね。それでも大分変わったわ」

「それは何より」

「けれどポストンみたいに落ち着いてはいないわね」

「ここはまた特別だからね」

彼はそれに応えた。

「何となく静かなのさ。人はそれなりに多いけれど」

「そうね」

「ゆっくりしてるだろ？僕が生まれた時からそうなんだ」

「あら、ポストン出身なの」

「そうさ。さっき言わなかったっけ」

「初耳よ、それ」

「そうか。じゃあ後はレストランでゆっくり話をしよう。君車は？」

「ないわよ」

キャシーはあっさりとそう答えた。

「おや、そうだったのかい」

「へりで来たのよ」

「ニューヨーカーらしいね。じゃあ僕の車に乗るといい」

そう言って自身のシルバーの車を紹介した。

「アニーっていうんだ。どうぞ」

「女の子なのね」

「車はね、そうだったんじゃないかな」

「そうだったかしら。けれど何か嫉妬されそう。御主人様の隣に座るんだから」

「それはないさ。彼女は車だよ」

ヘンリーは笑ってそれを否定した。

「人を乗せるのが仕事さ。じゃあ行こう」

「ええ」

ヘンリーはキャシーを車に乗せて自分も乗った。キャシーは助手席にいる。そしてシートベルトを締めてから車を出した。派手なエンジンの音を立ててアニーと二人は球場を後にした。

「あれ」

車を運転しながらヘンリーはあることに気付いた。

「どうしたの？」

「うん、ちよつとね」

とりあえずは誤魔化した。とてもアニーには言えないことであつた。

(まただ。一体どうしたんだらうか)

またハンドルやブレーキの調子がおかしいのである。乗り心地も急に悪くなった。どういうことが彼の言う事を急に聞かなくなった駄々っ子のもようであつた。

(どういうことなんだらう)

いい加減不思議に思いはじめた。こうしたことが度々重なると思わざるを得ない。彼はアニーのハンドルを握りながら彼女の異変について考えを巡らせていた。

だがその時間は長くはなかつた。レストランに到着した。見ればあまり格式ばつた場所ではなかつた。

「ここならその格好でも大丈夫だからね」

「あ、そうだつたわね」

キャシーは自分の格好に気付いた。ジーンズでは流石に格式のあるレストランに入ることはできない。これはアメリカでも同じであつた。

「ボストンは格式に五月蠅い店が多くてね。けれどここはそうじゃないから」

「何か結構アットホームな雰囲気ね」

店の外見も出入りする客もそうであつた。身なりもラフで家族連れが多い。そうした店なのであろう。

「そうだね。ここはそういう店なんだ」

彼は笑いながら言った。

「一人身にはいささか厳しい店だよ、実は」

「そうみたいね。けれど今は一人じゃないじゃない」

「とうとう?」

「私がいるからよ」

キャシーはそう言って笑った。

「二人だとおかしくはないでしょ、別に」

「まあね」

ヘンリーはそれに笑いながら頷いた。ここで一瞬後ろにあアニーを見た。

「!?!」

どういふわけか様子がいつもと違うように思えた。何処か違和感があった。いつもは落ち着いた感じであるのにどういふわけか今は陰気に見えた。銀色のボディの光が鈍く感じられたのだ。

「おかしいな」

「!?!何が」

キャシーがそれに気付いて声をかけてきた。

「あ、何でもないよ」

ヘンリーはそれを誤魔化した。そしてキャシーに対して店に入るように促した。こうして彼等は店に入った。陰気な感じのアニーにその背を見せながら。ライトが一瞬光ったように感じられた。

食事を終え店を出る。そしてまたアニーに乗った。

「これからどうするの?」

「そうね」

ヘンリーは車を走らせながらキャシーに尋ねてきた。

「ホテルはとつてあるしね。もう帰ろうかしら」

「早いんだね」

「あまり夜に何処かで遊ぶ趣味はないのよ」

彼女はそう答えた。

「ホテルでお酒でも飲もうかしら」

「いいバーを知ってるけど」

「バーはね。遠慮しとくわ」

「そう」

「ホテルでね、飲みたい気分なの」

「じゃあいいよ」

「貴方も一緒にどうぞ？」

キャシーはここでヘンリーを誘いだしてきた。

「一人で飲むより二人で飲む方が楽しいし」

「そうだね」

ここでまた異変が起こった。ハンドル、そしてブレーキの効きが今までよりさらに悪化したのだ。

「!?!」

「?また何かあったの？」

「あ、何でもないよ」

彼は咄嗟に誤魔化した。誤魔化すのはこれで何度目だろうと思っただ。少なくとも今日はじめてであった女性に対して何度も誤魔化すのはじめてであった。

「今車を運転しているしね。止めておくよ」

「そうなの」

「明日も仕事だし。残念だけれどね」

「わかったわ。それじゃ」

「うん」

丁度ホテルに着いた。彼女はヘンリーに別れを告げるとホテルに入って行った。そして彼はそれを見届けると自宅へ帰った。アニーのハンドルやブレーキは先程よりは幾分ましになったとはいえまだ重かった。それが彼にとつては首を傾げざるを得ないことであった。これが縁となった。ヘンリーとキャシーは離れてはいるが度々会うようになった。傍目から見れば付き合っていると云われる関係になるまでそう長い時間はかからなかった。キャシーは何時しかヘンリーの家にも出入りするようになっていた。

その間アニーの調子はずっと悪いままであった。それどころか今まで以上に酷い状況となっていた。たまりかねたヘンリーは一度彼女を修理業者に見せてみた。だがその返事は彼が予想していたもの

ではなかった。

「何処も悪くはないですね」

「そうですか」

それを聞いて意外に思わざるを得なかった。

「何処が悪いんですか？ 試しに運転してみましたけれど凄くいい車じゃないですか」

「普段はそうなんですけれどね」

彼は言った。

「けれど何か急に調子が悪くなったりするんです」

「女の子がむくれるみたいにですか？」

「面白い例えですね」

それを聞いて笑わずにはいられなかった。

「まあ大体そんなところですね」

「そうですか。見たところ美人ですしね」

「ええ」

愛車が褒められて悪い気はしなかった。

「おかしなところは本当に何もありませんよ。それは保証します」

「そうですか」

「ええ。もし何かあったらお知らせ下さい。まああと何年ももつでしょうね」

逆に太鼓判を押されてしまった。それを聞く限り本当に悪い部分はないようだ。だが実際に運転してみるとやはり動きが悪い。ヘンリーにはもう訳がわからなくなっていた。

第六話

家に帰ると車が一台停まっていた。見慣れない赤い車だ。

「何だ？」

見ればかなり大きな車である。キャデラックであった。

「誰の車なんだ？」

車のクラクションを鳴らした後でアニーから降りてそれを見る。するとそこで自宅の玄関から若い女の声が出た。

「おかえりなさい」

「キャシー」

キャシーが玄関から出て来た。黒いティーシャツに青いジーンズを着て髪は後ろで束ねていた。どうやらクラクションの音を聞いて家から出て来たらしい。

「待ってたのよ、貴方を」

「それはいいけれど」

彼はそれよりもこの赤いキャデラックの方が気になっていた。

「この赤い髪の女の子は誰なんだい？」

「私の車よ」

彼女はニコリと笑ってそう答えた。

「今日から暫く休みだから。車で来たのよ」

「そうだったんだ」

それを聞いて少し納得した。

「それにしてもキャデラックなんてね。えらく贅沢だね」

「あら、中古よ」

キャシーは笑ってその言葉を返した。

「中古車の販売店に入ったらすぐに目に入ったの。それで買ったのよ」

「よく中古車店にこんなのがあったね」

「運がよかったって言うべきかしら。何でも前のオーナーがもつと

いい車買うからって売ったのよ」

「そのオーナーってのはロックフェラーかい？」

「ふふふ、さてね」

キャシーはまた笑った。

「そこまでは知らないけれど。邪魔かしら」

「いや、別に」

彼はそれを否定した。

「家の前だったらね。別にいいよ」

「有り難う、寛大なのね」

「うちにはキャデラックを入れられるような駐車場もないしね。そこがいいよ」

「じゃあそこに停めさせてもらおう」

「ああ。ところで家の中で何をしていたんだい？」

「料理を作っていたのよ」

「料理」

どういいうわけか違和感のある言葉に思った。ヘンリーは働く女というものはあまり自分で料理を作らないという先入観があるのである。偏見と言われればそれまでであるが。

「料理できるんだ」

「当たり前でしょ、一人暮らしも長いし」

それを察したのかキャシーはむくれた。

「それとも何？レディーの手料理が食べられないっていつの？」

「いや、それはないけれど」

今度は宥めにかからなければならなかった。

「ただね、ニューヨークの料理はどんなものかな、って思って」

「安心して、腕には自信があるから」

「いや、気になっているのはメニユーなんだけれど」

「バーベキューリブよ」

「バーベキューリブ」

豚肉のスペアリブをソースに漬けてオーブンで焼いたものだ。

「それとマツシユポテト、コーンスープ、そしてレリツシユ＝サラダよ。どうかしら」
「いいね」

どれもアメリカではかなりポピュラーな料理である。レリツシユ＝サラダとは茹でて、絞ったキャベツを中心とした野菜類をドレッシングであえたものである。酸味のあるサラダである。

「どうかしら。御気に召して」
「ああ、素晴らしいね」

メニユーを聞いていると笑顔がさらに明るくなってきているのが自分でもわかった。

「是非共頂きたくなつたよ」
「じゃあ早く来て。ビールも用意してるから」
「さらに素晴らしいね。今行くよ」
「いらつしやい、貴方の家へ」

ヘンリーはアニーを駐車場に入れると自宅の中に飛ぶようにして入って行った。そしてそれから数日間彼女と二人きりで過ごした。既にそういう仲となっていたのであった。

楽しい数日間であった。休日でもあったので二人水いらすでもあった。彼等は心ゆくまで語り合い、共に時間を過ごした。だが時間は過ぎていくものでやがてキャシーがニューヨークに帰る時間となった。

「それじゃあね」
「うん、時間が経つのは早いね」
ヘンリーは玄関でキャシーに対して名残惜しそうにそう言った。
「そういうものよ、時間つてのはね」
彼女は苦い笑いを作ってそう応えた。

「仕方ないわ」
「これは僕の我が侘なんだけれど」
「何かしら」

ヘンリーは打ち明けた。

「二人で住まないか、ここに」

「ボストンに？」

「ああ。それなら二人ですつと一緒にいられるだろ」

「悪くはないわね」

拒否されるかと思っていたが意外にも彼女はそれに乗り気であった。

「ここはいい街だし。考えさせてもらうわ」

「ニューヨークでの君の仕事の都合があるだろうけれど」

「そうね、今の仕事が全部終わったらね」

彼女はさらに前向きな言葉を述べた。

「ここに居候させてもらっていいかしら」

「居候だなんてとんでもない」

ヘンリーは真面目な態度でそう言った。

「パートナーとして。いいね」

「わかったわ。パートナーとして」

「うん」

二人は頷き合った。

「それじゃあね。今度ここに来る時は引越しの時よ」

「ああ、待つてるよ」

プロポーズは上手くいった。ヘンリーはその結果に満足していた。キャシーは家を出てその赤いキャデラックに乗った。そしてボストンを後にしたのであった。

「さてと」

彼はそれを見届けた後で家の中に戻った。

「これからが大変だな」

手続きや式の問題もある。今から気が早いと言われようともそれについて考えるだけで気が楽しくなる。彼はうきうきした気持ちで後片付けをしてベッドに入った。今日の朝まで彼女も一緒にいたベッドであった。

その中に入ってその日は休んだ。次の日から仕事とは別に何かと

忙しくなるだろうとあれこれ考えながら眠りに入った。楽しい眠りであった。彼にとつては楽しい日々のはじまりであった。

だがそれを苦々しく思っている者もいる。その者はヘンリーがどう思っているのか嫌になる程知っていた。そして動いた。闇の中に鈍い二つの光が煌いた。

心地良い朝であった。ランニングを済ませシャワーを浴び、食事と身支度を終えて家に出る。そしていつも通りガレージを開けてアニーに挨拶をした。

「おはよう、アニー」

当然返事はない。だがアニーはどういうわけか上機嫌なように見えた。

「今日も頼むよ」

そう言いながらキーを入れてエンジンをかける。そして車を前に動かした。

「おや」

また調子が元に戻っていた。ハンドルもブレーキも軽い。そして乗り心地もいい。実に快適であった。

「またか」

不思議と言えば不思議であった。いつも急に調子が戻る。だが彼はそれについてあまり深く考えずにそのまま事務所に向かった。そして事務所に入った。

「お早うございます」

「ああ、お早う」

所長に挨拶をすると彼はいつものように快く迎えてくれた。彼は挨拶の後で自分の机に向かった。そしてそこに座ろうとした。だがここでふと目と耳にあるものが入ってきた。部屋のテレビがつけられていたのである。

「昨日は何かつたのかな」

「何でもシカゴの方でマフィアの抗争があったらしい」

見ればキャスターが真剣な顔でニュースを伝えている。後ろの画

面には銃撃戦の後の傷付いた街並が映されていた。そして人相の悪そうな男達の顔も映し出された。

「何か見たことのある顔ですね」

「当たり前だ。あちらの暗黒街の顔役達だぞ」

同僚の黒人の弁護士がヘンリーに対してそう言った。

「昔からのな。れっきとしたシチリアン」マフィアだ」

「シチリアンか」

ヘンリーはそれを聞いて考える顔をした。

「身内同士の争いかな」

「どうやらそうみたいだな」

紹介されている男達の姓は皆同じであった。名前だけが違う。その姓もイタリア系のものであった。

「後継者か何かの争いらしいな」

「よくあることだね」

ヘンリーはいささかシニカルにそう述べた。

「ああした組織ではね」

彼はマフィアと関わりになったことはない。元々そうした関係の仕事はこの事務所においては取り扱ってはいない。表の仕事だけを行っているのである。だから彼もそうなのであった。

マフィア関連のニュースが終わると今度はマサチューセッツのニュースに移った。所謂ローカルニュースである。

「何事もありませんでした」と

「そうだったらいいな」

同僚のジョークに笑った。しかしそうもいかないのが世の中だということも彼もよくわかっていた。

殺人事件のニュースがあった。放火による殺人と銃の乱射だ。アメリカではいつも銃による殺人事件が起こる。アメリカという国の持つ病の一つであった。

「どうしようもないかな」

彼はそれを聞いてそう思った。実は彼も護身用に家に銃を持って

いる。誰でも銃が手軽に買えて発砲することができる、それがアメリカ力であった。彼もそれがよくわかっていいるからどうしようもないのではないかと思つたのだ。今のところ使う機会はなかったがこれからはわからない。この国は建国前から銃に頼つてきた、イギリスから独立できたのも、開拓を成功させたのも、多くの戦争に勝つてきたのも銃のおかげであった。暗部と言えは暗部になるかも知れない。だがそれがアメリカの歴史であった。

これには白人も黒人も関係ない。当然アジア人でもだ。彼等は最初からアメリカにいたわけではない。後から来たのだ。経緯は様々としても。ネイティブの土地と命を奪つたのは白人だけではないのだ。黒人の騎兵隊もいれば黒人のガンマンやカウボーイもいた。カウボーイの三人に一人は黒人であり、バファローを余興として撃ち殺していた者達の中にも大勢の黒人がいた。そうした意味で黒人もまた銃を使つて侵略をしていたのであつた。彼もまたアメリカ人だからそれは知つていた。西部劇は白人の正義の歴史の記念碑では本来ないのだ。あくまでアメリカの侵略の歴史である。侵略の善悪なぞどうでもいいものだ。ただそれが銃によるものであり、それによりアメリカという国が誕生した以上この国は銃から離れることはないのではないかとさえ思つていた。

ニュースは続いていた。今度は交通事故のニュースであつた。
「本日未明」

キャスターの言葉が続く。そして後ろには映像が映し出された。そこには派手に破損した赤い車が映つていた。

「赤」

ヘンリーはそれを見てすぐに反応した。ただこの瞬間は反応しただけであつた。

「ハイウェイにて赤いキャデラックが衝突事故により破壊される事件が起こりました」

「キャデラックだつて!？」

「おいヘンリー、どうしたんだい!？」

それを聞いた所長と同僚達が彼に声をかけてきた。

「そんなに驚いた顔をして」

「え、いえ」

彼等に声をかけられヘンリーは少し我に返った。その間にもキャスターの言葉は続く。

「ちよつとね」

「車の中に乗っていたのは」

「何っ!？」

名前を聞いた。最初聞いた時は我が耳を疑いたかった。

「キャシーだ」

彼女の本名であった。テレビに映る写真も彼女のものであった。

間違いなかった。

「後ろから追突された時の衝撃と車の炎上により死亡しました。今マサチューセッツ州警は彼女の詳しい死因及び衝突したと思われる車を探しております」

「馬鹿な、そんな……」

ニュースを聞いても信じられなかった。彼は信じたくはなかった。信じられないというより信じたくはないという気持ちの方が大きかった。

「一体どうしてそんなに驚いているんだい？」

「そつだよ。いつものヘンリーらしくないぜ。どうしたんだ」

「実はね」

彼は詳しいことを話した。キャシーと自分のことを。結婚の約束までしたことを。そしてそれが昨日の夜だったことも。全て話した。「そつだったのか」

所長はそれを聞き終え沈んだ声で頷いた。

「気の毒にな。悪いがそれしか言えない」

「俺もだ。何と言っていいかわからない。済まないな」

「いえ、いいです」

ヘンリーは慰めの言葉に顔を少し上げた。

「もつどうやってもどうしようもありませんから」

「それはそうだがね。しかしおかしいな」

「何がですか？」

「こつちで話そうか」

彼はそう言つてヘンリーを自室に案内した。そして彼を座らせて二人で話をはじめた。

「最近の君のことだがね」

「はい」

所長は応接用のソファアにて彼と正対していた。二人は向かい合つていた。

「どうも身の周りの女性が次々と亡くなっているような気がするんだ」

「まさか」

「いや、本当だ」

彼は否定しようとするヘンリーに対して言った。

「まず君の担当だった未亡人だ。彼女は何者かにはねられたな」

「ええ」

「次にレストランのウェイトレス。彼女も交通事故だった」

「はい」

「そして今君の恋人だ。彼女も交通事故だ。これで三人目だ」

所長は何かを探るような目と声で話をしていた。話しながら考えてもいるようだ。

「君の周りで続けて三人も交通事故で死んだ。それも女性ばかり。」

「これでは奇妙に思わない方がどうかしているのではないかね」

「ですが私は」

彼はキャシー以外に最近付き合った女性はいない。ましてや誰か、女性に恨まれるような真似もしてはいない。ストーカーといつても今回は本当に身に覚えがなかった。

「わかつているよ、君はそんな男ではない」

所長は彼が何を言いたいのがよくわかつていた。

「時々頭のおかしな者がいるのも事実だがね。だがここまでやって誰も犯人を見ていないというのもまた変な話だ」

「そういえば」

この三件の事故はどれも相手が見つかってはいない。犯人はおろかその車さえ見つかってはいないのである。ただはねられ、死んだということしか残ってはいないのだ。

「おそらく君の周辺が関係しているだろう。思い当たるふしは本当にないのだね」

「はい」

彼はきつぱりとそう言い切った。

「全くありません」

「そうだろうな」

これも彼が予想した答えであった。

「少なくとも人間はそうだろうな」

「!？」

それを聞いて妙な感じを覚えた。

「それは」

「いやな、君が最近これといって女性と付き合ってはおらず、また恨みも買ってはいないことはわかるんだ。けれどな、今回はやけに何かを感じずにはいられないんだ。私の推測でなければいいがな」

「はあ」

「最近身の周りで何か変わったことはないかね？」

「私のですか!？」

「そうだ。思い当たるふしはないかね」

「そうですね」

彼は腕を組み考え込んだ。それから言った。

「そういえば今乗っている車ですが」

ふとアニーのことが思い浮かんだ。

「時々調子が悪くなるんですよ」

「どういう時だね？」

「どういつ時と言われましても」

またそれを聞いて考え込んだ。

「何か時々でしてね」

「今はどうなんだね」

「凄くいいですね」

「そうか」

所長はそれを聞いて何でもないかという顔をした。だがヘンリーはここで言った。

「そういえば」

「そういえば!？」

「何か僕が女の子と知り合いになると急に調子がわるくなるような」

「で、今は調子がいいと」

「はい。まあ偶然でしょうけれどね」

「いや、それはどうかな」

所長は明らかにそこに疑問点を見出していた。

「どう御考えですか？」

「君は日本の妖怪について知っているかね」

「狐や狸、あと鬼の話が多いとは聞いています」

実はあまりよくは知らない。何でもアメリカから日本に渡って文豪になったという人物が昔いたとは聞いている。彼はよく日本の妖怪ものを書いていたというが。

「そうだな。後は天狗か」

「どうやら所長は日本のそうした話しに結構詳しいらしい。」

「だがな、それだけではないんだよ、日本の妖怪は」

「あと幽霊の話が多いそうですね」

実は彼は現実主義者である。あまりそうした話に興味はないが、応会話ができる程度には話を知ってはいた。

「そしてまだある」

「?それは」

「物がな、妖怪になるんだ」

「物が!？」

「そうだ」

所長が頷いた。

「例えば傘だ。傘が変化して妖怪になるのだ」

「はあ」

これは何処か、映画か漫画でチラリと見たことがある。傘に足が生えて、そして目と口が一つずつある。しかも手まで生えている。独特なデザインだとは思っていた。

「他にも筆や扉もなるな。日本にはこうした話が多い」

「御言葉ですが所長」

「どうした」

「まさか僕の車に何かあると思ってはおられませんか？」

「その通りだが」

彼は答えた。

「まさか、そんな」

ヘンリーは笑ってそれを否定した。

「車がそんな。安物の映画じゃあるまいし」

「しかし実際に調子が女の子と知り合ったら悪くなって、死んだら急によくなるのだろう」

「それはまあそうですね。偶然ですよ」

「いや、そうともばかり言えないだろう。実際に君の周りで三人の女性が死んでいる」

「はあ」

「それも怪死ばかりだ。どう考えてもおかしいだろう」

「まあそうですね」

「やはり何かある、まして君の車がそんなに都合よく調子が変わるとすると」

「アニーが彼女達を殺したと？」

「証拠はないがな。ましてやこれはオカルトな話だ」

「はい」

「我々の事務所であやるような仕事ではない。むしろ教会だ」

「エクソシストですか」

「そういつた方面だな。まあ君の宗派はどうか知らないがバチカンにはまだある」

「それは聞いたことがあります」

「だが今回のような件はおそらく専門外だろう。彼等は悪魔や悪霊がその対象だ」

「ですからアニーは」

「言い切れるかね？」

「勿論ですよ」

彼は答えた。

「車が一人でに動くことなんて有り得ないですし彼女は傷一つないんですから」

「それは有力な証拠だな」

「でしょう？アニーの無実はこれで証明できます」

ヘンリーの運転は慎重である。今まで事故一つ起こしたことはない。アニーも買った時のまま綺麗なものである。若し人をはねたり轢いたりしたならば何処かに傷があるだろう。そして血でも付いている筈だ。だがそんなものは今まで何処にもなかったのである。

「おわかりになられたでしょうか」

「そうだな」

所長はとりあえずは頷いてみせた。

「アニーが普通の車だったらの場合は」

「まだ疑っておられるのですか」

「ヘンリー君、若し彼女が無実だった場合責任は私が取るう」

身を前に乗り出してきた。

「どうということですか？」

身を乗り出してきた所長に伝えて彼も身を前に出して。二人は鼻が着かんばかりに顔を近付け合った。

「一度車に傷でもつけてくれ」

「アニーに」

「そうだ。いいかな」

「そんなに疑っているのですか」

「若しもだ。もしそれで何もなかったら車の修理費は私が全額出す。それでいいかな」

「悪い条件ではないですね」

むしろかなりいい。傷を付けるにしても軽いものでいいと思った。それで疑いが晴れるのならば安いものだ。あまりにも何時になくオカルティックな所長にも嫌気が差していたところだ。彼はそれに頷いた。

「いいでしょう。やってみます」

「よし」

所長はそれを聞いて大きく頷いた。

「では早速やつてもらおう。いいね」

「わかりました」

それで所長の気が済むのなら早い方がいい。彼は家に帰るとこっそりとコインでアニーの後ろに傷を付けた。綺麗なボディに傷が付くのはいたたまれなかったが。

(済まないな)

こっそりと謝罪する。これでアニーの嫌疑は晴れた、そう思った。そもそも車が何をするのだろうと思った。彼は所長に対して疑問を持ちはじめていた。

だがその疑問は次の瞬間に完全に消えた。同時にアニーの傷も。

両方共瞬く間に消えてしまったのだ。

「これは……」

流石に呆然とした。今つけたばかりの傷がすうっと消えてしまったのだ。跡形もなく消えてしまった。さしものヘンリーもそれを見て我を失ってしまった。

「……」

そのまま自宅の駐車場から姿を消した。今自分自身で見たことが

信じられなかった。彼は一人考えても仕方のないことを考えながらその夜を過ごした。結論はもう出ていた。それを自分自身に言い聞かせるだけであつた。

「そうか」

次の日の朝所長はそれを聞いて全てを悟つたように頷いた。

「では間違いないな」

「所長は本当にそう考えておられるのですか？」

昨日は殆ど眠れなかった。ヘンリーは憔悴した顔で所長に尋ねた。

「何をだね」

「アニーが人殺しをしたということですか」

「君は実際に見たのだろう」

「はい」

疲れた声で応えた。

「車の傷が消えていくのを」

「確かにこの目で見ました」

彼はそれを認めた。

「ですが。まさか車が」

「昨日言つた筈だが」

所長はヘンリーに親が子供に言つて聞かせるような穏やかな調子で語つた。

「物が意識を持つという話を」

「それはそうですが」

「傷があつたという間に消えたのだろうか？それだけで君の車は普通ではない」

「それは認めます」

ヘンリーはそれは否定しなかった。

「しかしですね」

「有り得ないとも言つのかな？」

「当然ですよ」

彼はまだそれを信じなかった。いや、信じたくはなかった。

「そんな非科学的な」

「確かに非科学的だな」

所長もそれを認めた。

「だがな、科学だけでこの世の全てを断定できるかね？」

「それは」

「それができると言い切れる程君は世の中について無知ではあるまい」

「それはそうですね」

「それならばわかる筈だ。いいね」

「具体的には何をやるおつもりですか」

「君の車は確か君が女性と遭えばそうなるのだったね」

「はい」

「私はそれを利用してようと思っているんだ」

「どうするおつもりですか？」

「いいかね」

所長は話をはじめた。そして彼はヘンリーを納得させた。

「いいね」

「それで効果があるのなら」

彼は頷いた。

「宜しく願います」

「よし」

これで決まった。ヘンリーはこの謎に関して所長の指示の下動くことになった。すぐに準備がはじめられた。

第七話

ヘンリーは盛んに繁華街へ行くようになった。そして手当たり次第にあちこちの酒場に入る。アニーに乗って店へと向かうのであった。

「あら、珍しいわね。ここへ来るなんて」

知り合いのホステスに声をかけられた。このホステスの離婚問題の際に仕事をしたことがある。それから知り合いになった。外見は派手だが気のいい女である。今は年下の恋人がいるらしい。名をミステイという。

「何を飲みたいのかしら」

「バーボンがいいね」

ヘンリーはにこりと笑ってそれに応えた。

「ボトルをキープしてね」

「たまたま入ってきてキープなんて。飲む気満々ね」

「お酒は嫌いじゃないのは知ってるだろう？」

「ええ、まあ」

ヘンリーは煙草はやらないが酒は好きだ。ウイスキーもバーボンも浴びるように飲む時がある。

「じゃあ頼むよ。ひよっとしたら今日で一本空けるかも知れない」

「あら、強気ね」

「飲めるさ、それ位」

彼は言った。

「じゃあ賭けるかい？僕がボトル一本今日一日で空けられるかを」
「悪くないわね」

ミステイはそれを聞いて面白そうに微笑んだ。彼女が賭け事を好きなのを知つての言葉だ。

「賭けるのは何かしら」

「そうだね」

ここまででは彼の計算の範囲内だ。チラリと駐車場を見る。アニーが夜の闇の中に停まっていた。

「君にボトルを二本奢るといっつのはどうだい？ 僕が飲むのと同じラベルのをね」

「気前がいいわね」

更に乗りに気になった。これも計算のうちだ。彼女は酒も好きなのである。

「じゃあそれでいいね」

「ええ」

こうして賭けは決まった。彼は店の中に入りカウンターに座ると早速バーボンを手にした。ラベルは彼がいつも飲んでいるお気に入りのものだ。かなり高級なものである。

「いいの？ これ、かなり効くわよ」

「知ってるよ」

彼は余裕を以って頷いた。

「だからこそ飲むんだよ。そうでない面白くないだろう？」

「ええ」

「殺鼠はじめよ。いいね」

「それじゃ。時間は？」

「そうだね」

彼は店の時計を見て考えた後で言った。

「一時間だ。いいね」

「わかったわ。それじゃ」

「うん」

彼は飲みはじめた。ボトルの中の茶色の魔法の水を瞬く間に飲み干していく。そしてそれを完全に空にした時に丁度一時間となっていた。

「どうかな」

「やるわね。あたしの負けね」

「そうだね。けれどまだ飲みそうだ」

「あら、大丈夫なの？」

ミスティは彼に微笑みながら言った。

「一本空けたのに」

「どうも今日は調子がよくてね。まだ飲めそうなんだ」

「本当に？」

「ああ。だからもう一本。また賭けるかい？」

「今度は何かしら」

「僕の家にあるワインのラベルを全部。それでいいかな」

「確か貴方の家のワインには」

「そうさ、トカイがある」

彼はニヤリと笑って答えた。欧州で王族達が親しんだ半ば伝説と
なっているワインだ。甘みの強い、美味しい酒である。値もかなりす
る。

「トカイ」

それを聞いたミスティの喉がゴクリ、と鳴った。

「それでいいかな」

「勿論よ」

彼女は目を輝かせてそれに頷いた。

「けれど本当にいいのね？」

「何がだい？」

「トカイなんてよ。そんな高いお酒。本当に譲ってくれるの？」

「おいおい、まだ君が勝つと決まったわけじゃないよ」

「それはそうだけど」

しかし彼女はもう賭けに勝った気分だった。今のヘンリーの酔い
ぶりから見ればそれも当然であった。

「けれど、本当にいいのね？」

「ああ」

ヘンリーは頷いた。

「じゃあ時間は一時間でね。それでいいね」

「ええ」

今度はミスティが頷いた。

「それじゃあはじめようか」

こうしてヘンリーはまた飲みはじめた。相変わらず見事な飲みっぷりである。そして全て飲み終えたところで彼はグラスを置いた。

「僕の勝ちかな」

「残念だけれど」

ミスティは首を横に振った。

「貴方の負けよ。時計を見て」

そう言いながら壁に掛けられていた時計を指差す。

「ちえっ」

ヘンリーはそれを見てわざと悪態をついた。一分遅れであったのだ。

「一分位いいじゃないか」

「時間はきちんと守るのが貴方の主義じゃなかったかしら」

ミスティはからかうような口調で彼に言った。

「弁護士なんだし。どうかしら」

「わかったよ」

彼は苦い顔を作ってそれに頷いた。

「君の勝ちだ。約束通りトカイは全部あげるよ」

「有り難う」

彼女はそれを聞いて微笑んだ。

「じゃあ有り難く貰うわね」

「ああ。けれどただ一つ問題があるんだ」

「何かしら」

「今僕はお酒が入っているね」

「ええ」

「車を運転するわけにはいかないんだ。家まで頼めるかな。帰りのタクシー代は出すから」

「ああ、そんなことだったの」

ミスティはそれを聞いておかしそうな笑みになった。

「いいわ、喜んで」

「優しいんだね」

「当然でしょ、トカイの為だもの」

「僕の為じゃなくて」

「悪いけれど貴方はタイプじゃないのよね」

「おやおや」

「けれどいいわ。運転は任せて」

「お願いするよ」

「今から行くわね」

こうして彼女はアニーに向かった。ヘンリーは酔ってはいるが確かな足取りでアニーに進んだ。そしてゆっくりとした動作で助手席に座った。運転席にはミスティがもういた。

「行くわよ」

「うん。カーナビあるからそれに従ってね」

「ええ」

こうして二人はアニーに乗ってヘンリーの家に向かった。その途中でヘンリーはミスティに尋ねた。

「乗り心地はどう？」

「悪くないわ」

彼女は答えた。

「凄くいいじゃない。こんな車はじめてよ」

「そうなんだ」

それを聞きながら違和感を感じていた。何か自分とは違うのだからか。

「ハンドルもいいし……あれ!？」

「どうしたんだい!？」

不意に声をあげたのでハツとして尋ねた。

「いえ、ちよつとね」

ミスティは戸惑いながら答えた。

「急にハンドルの調子がおかしくなったのよ。何故かしら」

「……そう」

それを聞いたヘンリーの顔色が急激に悪くなった。酔いも醒めてきた。

「そんなに酷いの？」

「いえ、それ程じゃないけれど」

彼女はハンドルを操りながら答えた。

「何かね、もつれるのよ。乗り心地も急に変になったし」

「そうなんだ」

それを聞いてやはり、と思った。だがそれは口には出さない。

「大丈夫？」

「今のところはね。これ位なら平気よ」

「だったらいいけれど」

そうは言っても安心はできなかった。

「何かあったら大変なことになるからね」

「私の車ってオンボロでね」

運転しながらまた言った。

「こんなのは比較にならない位運転しづらいのよ。だから平気よ」

「そうなんだ」

「だから安心していて。大船に乗ったつもりでね」

「ああ。ところでもう一つ聞きたいんだけど」

「何かしら」

「今日はもう店じまいだよね」

「そうね」

ミスティは運転席にあるデジタル時計をチラリと見た後で答えた。

「もうそんな時間ね。けれどどうして？」

「いやね」

ヘンリーは微笑んでから言った。

「うちに泊まったらどうかなくて。もう遅いし」

「誘ってるのかしら」

「さてね」

彼は笑みを深めた。まるでアニーに言うように。
「どうか。君にとっても悪くないと思うけれど」
「前に言ったわよね」

アニーもそれに合わせて笑っていた。

「貴方はタイプじゃないって」

「おや、そうだったかな」

わざととぼけてみせた。しかしその目と心は実はミスティには向
けられてはいない。

「それにそんなに酔って私の相手はできるの？言っておくけれど私
は積極的よ」

「ふふふ」

ここは笑って誤魔化した。

「無理だと思っけれど。それでも魅力的ではあるわ」

「僕がかい？」

「まさか。トカイがよ」

そう言うミスティの目も顔も笑っていた。それが待ち遠しくてた
まらないようであった。

「一つ聞きたいけれど泊まったらそこでトカイも飲んでいいわね」

「勿論だよ」

彼は喜んでそれを認めた。

「好きなだけ飲んでいいよ。何本でも」

「わかったわ。じゃあ泊まらせてもらっわ」

「了解」

「肴は何があるかしら」

「チーズならたんまりと」

彼は答えた。

「モツアレラでもカマンベールでも何でも」

「用意がいいじゃない。いい旦那になれるわよ」

「生憎それだけじゃ今時の女の子は振り向いてくれなくてね。今だ
に花の独身貴族さ」

「あらあら。じゃあ立候補してあげようかしら。花嫁候補に」
「今さつきタイプじゃないって言ったじゃないか。それに恋人もいるんだらう？確か年下の」

「よく知ってるわね」

「君自身から聞いたことじゃないか。離婚した後暫くしてから」

「記憶力いいのね、酔ってるのに」

「職業柄ね。知らないことも覚えてるのさ」

「あと減らず口もね」

「ふふふ」

そんなやりとりをしながらヘンリーの自宅に着いた。彼はミスティをリビングに案内するとキッチンのワインボックスを空けてそこからボトルを二本取り出して来た。

「とりあえずは二本でいいかな」

「ううん」

だが彼女はいささか不満そうであった。それを見てヘンリーはまた動いた。そしてもう二本持って来た。

「じゃあこれで」

「いいわ」

それでようやく頷いた。四本のボトルをテーブルの上に置くと今度はチーズを持って来た。ハム等も出す。

「あら、チーズだけじゃないのね」

「たまたま冷蔵庫にあつてね」

「そうなの。何か豪勢になってきたわね」

「そうかな。ごくありふれた肴だと思っけれど」

「一品より二品ある方がいいじゃない。そういうことよ」

「そんなものかね」

「私はそう思っけれど。じゃあ早速頂くわね」

「どうぞ」

グラスも出した。ミスティは自分で栓を抜くと早速飲みはじめた。すぐに顔が赤く染まっっていく。

「美味しいわね、やっぱり」

「気に入ってもらえたかな」

「ええ。幾らでも飲めるわ、これだと」

「それならいい。じゃあ気の済むまで飲んでくれ。どのみち君のものだしね、うちのトカイは」

「何かラッキーね。こんな簡単にトカイが飲めるなんて。嘘みたい」

「嘘じゃないよ、本当のことさ」

「後で何かあったりして。上手い話には裏がある、ってね」

「まさか」

「そうよね、あはは」

ヘンリーは話しながらミスティに対して言った。君にはね、と。だがそれは黙っておいた。話すと問題がややこしくなるとわかっていたからであった。

その日はミスティは朝まで飲んでた。彼女の話によると次の日は休みであるらしい。だから好きなだけ飲めるのだと。それはヘンリーにとってラッキーと言えばラッキーであった。ただし、何故ラッキーなのかは彼にしかわからない。この家にいる者でそれを知っているのは彼だけであった。

朝になるとヘンリーは起きてそのままランニングと身支度を終えて家を出た。出て来る時居間を覗くとミスティがまだ飲んでた。チーズもハムも殆ど残ってはいなかった。

「行ってらっしゃい」

「うん。まだ飲むつもりかい？」

「いえ、流石にもう駄目よ」

彼女は笑ってそう答えた。

「今日はね。六本空けたし」

「随分と飲んだんだね」

「いつもこれ位飲むわよ。ワインならね」

「強いね」

「お酒にはね。男には弱いけれど」
「おやおや」

冗談を交えてそう言う。だがそんな彼女も流石に限界であった。そのままソファに寝転がってしまった。

「それじゃあね。少し寝かせてもらうわ」

「ああ。じゃあね。夕方には帰るから」

「わかったわ」

毛布を持って来るともう寝はじめていた。身体にそっとかけて家を後にする。そしてアニーに乗った。

「やっぱりな」

車を運転してみてそう思った。やはりハンドルもブレーキも調子が悪かったのだ。

事務所に入るとすぐに所長の部屋に入った。そして何やら話をした後で仕事に取り掛かった。その日はそのまま仕事に専念した。それが終わると家に帰った。所長に何やら話した後で。

夜にミステイはヘンリーの家を出た。一人であった。夜に女性が一人で歩くのはどうかと言われたがそれでも彼女は一人で家を出た。ヘンリーはそれを玄関で見送っていた。

「やれやれ」

困った顔をする。そして家の中をチラリと見た。

「まあいいか。本当に女性が一人とは限らないしな」

そう言つて笑つと家に消えた。それから暫く経つと駐車場のガレージがゆっくりと開いた。アニーが音もなく前に出て来た。ライトはもう点いている。そしてそのまま何処へと消えて行った。

彼女はそのまま夜道を走っていた。寂しい道であった。灯りはあるがぼんやりとしたものであった。アニーはそのぼんやりとした灯りの中を進んでいた。だが一つ奇妙なことがあった。

その運転席には誰もいなかった。他の席にもいない。しかしそれでも彼女は進んでいた。ハンドルとブレーキ、アクセルだけが動いていた。誰もいない筈だというのに。

ライトは前を見ていた。何かを探すように辺りを照らす。そして道を進んでいた。

やがて女の後ろ姿が見えてきた。ミスティに見えた。それを確認するとアニーはスピードを上げた。

一直線に向かう。そしてそのまま突進する。まるで彼女を狙っているかのよう。

「所長！」

そこで若い男の声がした。

「うむ！」

女から声が出た。それは何と男の声であった。

道の端からヘンリーが飛び出て来た。そして女を横にはねやった。そのうえでアニーの前に飛び出て両手を大きく広げて仁王立ちになった。

「アニー、止めるんだ！」

「！！」

それを受けてか、ヘンリーの姿を認めてかアニーは動きを止めた。そしてヘンリーにあたる寸前に完全に停止した。

「思った通りだったな」

「はい」

ミスティの正体は所長であった。彼はカツラや服でミスティに変装していたのであった。

「まさかとは思ったのですが」

「言っただろう、世の中には科学だけでは説明できないことがあると」

「はい」

ヘンリーは強張った顔で頷いた。

「まさかアニーが。それも一人で」

「これが現実だ」

所長はヘンリーの横に来ていた。そしてヘンリーのそれと同じく強張った顔で言った。

「正直私も驚いているよ。本当だったとは」

「でしようね。しかしこれで事件の真相がわかりました」

「ああ」

「アニー」

ヘンリーはアニーに語り掛けた。

「まさかとは思っていたけれど」

アニーは答えない。そのライトの光が弱々しく点滅しているだけであった。それを見ただけで彼女が心を持っているということがわかる。

「今まで……君がやっていたことなんだね」

答えはしない。だがそれでも真相はわかった。

「残念だ。君は今まで僕のよいパートナーだと思っていた。それが何故」

「よいパートナーだったからだろう」

ここで所長がこう言った。

「所長」

「パートナーだったからだ。彼女は君を愛していたんだ」

「僕を」

「そうだ。彼女は心を持っていた。それならば君に対して何らかの感情を抱くのは当然だろう」

「はい」

「彼女はマスター、いやパートナーとして君を考えたんだ。最初に出会った時から」

「そつえば」

納得がいった。何故今まであれ程乗り心地がよかったか。それは彼女が彼に対して気を利かせていたからであった。好意故に。

「ではアニーは」

「君を愛しているのだろうか、女性として」

「そうだったのか、アニー」

車だからだろうか。彼女は答えない。しかしその沈黙の中におい

て彼女は答えていたのだ。ヘンリーにはそれがよくわかった。

「そうだったのか……。だから」

「おそろくな。そういうことだったのだろう」

「アニー、それには気がつかなかった。僕は君が心を持っている」とさえ気付かなかった。まさかそんな」

「普通はこうしたことは有り得ない。だが本当のことだった」

「何ということだったんだ」

「だがヘンリー、わかってるな」

「はい」

ヘンリーは所長の言葉を受けて頷いた。

「わかっています、少なくともわかってはいるつもりです」

「では君の手で全てを終わらせるんだ。いいね」

「わかりました」

彼はそれを受けてゆっくり前に出た。そして静かな口調でアニーに語り掛けた。

「アニー、よく聞いて欲しい」

アニーのボンネットに手をやる。互いの温かさが感じられた。

「君が愛してくれたのはわかった。それに気がつかなかったのは済まなかったと思っている」

アニーは黙ってそれを聞いている。やはり一言も発しない。所長は二人を見守っていた。まるでヘンリーの後ろを守るかのようにそこに立っていた。

「それを理解したつもりのおうで言わせてもらう。いいね」

そしてまた言った。

「僕を愛してくれていることには素直に感謝したい。だけれど」

「だけれど」

所長は次に彼が出す言葉に注目した。アニーも。

「だからといって他の女性を殺めてはいけない。それは愛じゃない、憎しみなんだ」

憎しみ、という言葉にアニーが反応した。ブルツ、と身体を震わ

せた。

「僕は愛は受け入れられる。けれど憎しみは受け入れることはできない。それは何故かわかるかい？君は今の僕の言葉でそれがわかっている筈だ」

そう、アニーはわかっていたであろう。だがそれでもヘンリーは言った。

「憎しみを持つ者はそれにより自分を滅ぼしてします。そして他の人も。だから僕は憎しみを受け入れることはできないんだ」
「以前言っていたことだな」

ヘンリーは彼が自分の事務所に来た時に言った言葉を思い出していた。自分は人達の憎しみを消す為に弁護士になったのだと。訴訟社会であるアメリカにおいては実に難しいことであるのをわかつたうえで。それを聞いて彼はヘンリーを気に入った。だからこそ事務所所に置いているのだ。

「だから君を受け入れることはできない。そして君に言いたい」
「罪のことが」

所長はふとそう思った。その通りであった。

「君が今まで犯した罪を償って欲しい。それだけだ」

アニーは最後までそれを聞いていた。話を聞き終えるとまた身体を震わせた。そしてゆっくりと後ろへバックしはじめた。

「ヘンリー」

「大丈夫ですよ、所長」

彼が轢かれるのではないかと危惧した所長に対してそう述べた。

「しかし」

「心配は無用です。彼女はわかってくれました」

「本当かね」

「ええ。ですから安心して下さい」

「わかつた。それでは君を信じよう」

「有り難うございます」

アニーはそのまま下がって行く。そして反転した。そのまま何処

かへと去ってしまった。

「行きましたね」

「彼女は一体何処へ行くつもりだ」

「罪を償いに行くのでしょうか」

「罪をか」

「はい。私の言葉が伝わったようですから」

「だいいいのだがな」

「私は信じていますよ、彼女を」

「償うことをか」

「はい。ですが」

ヘンリーはここでその顔を哀しくさせた。

「彼女と会うのはこれが最後です。おそらくは」

「それはわかる」

所長もそれを聞いて頷いた。

「残念なことだな」

「そうですね。罪を犯せば償わなくてはならな

いのはこの世の摂理ですから」

「だからこそ法律が、そして神の存在がある。そうですね」

「ええ」

彼は所長の言葉に頷いた。

「行きますか。全ては終わりました」

「そうですね。それでこれからはどうするんだ」

「明日はバイクでそちらに向かいます。当分はそれですね」

「そうか」

「ずっとかも知れませんが。今はアニーのことを思うと車は」

「わかってるさ、それについては何も言わない」

「有り難うございます」

「それに関しては君に任せるよ。私が言っても何にもならないだろ

う」

「すみません」

「ところで彼女はどつする」

「彼女!？」

いきなり思いも寄らない単語を聞いてキョトンとした。

「あの、彼女というのは」

「おいおい、ミステイのことだよ。まだ家にいるんだろつ」

「あ、そうでした」

それを言われてやつと思ひ出した。

「彼女今日はオフらしいんですけれど」

「いや、そういう問題ではなくてだ」

所長は言いながら口を尖らせはじめた。

「じゃあ何が」

「いや、いい」

それ以上言うつもりはなかった。そして二人は黙つたままヘンリーの家に帰つた。それでこの騒動は一応の終わりを見た。

アニーはそれから二度とヘンリーの前に姿を現わさなかった。何処へ行つたのだらうと思つていた矢先ふとこうした噂が彼の耳に入つて来たのであつた。

真夜中のボストンの港に車が飛び込んだ、と。運転手は誰かはわからない。自殺だらうと噂されたが詳しいことは一切わからなかつた。

「そうか」

彼はそれを聞いて彼女だとわかつた。噂であるが彼女が自分でそうして終わらせたのだと思つた。それからアニーを見た者は誰もいなかった。こうして話は終わった。

以後彼は車を買うことはなかつた。バイクに移つた。だが時々車の店には足を運んだという。そしていつもシルバーの車をいとおしげに見ていたという。まるで恋人を見るように。

アニー

アニー 完

アニ-

2
0
0
5
・
8
・
2
8

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3029a/>

アニー

2008年11月7日07時34分発行